

編集委員会便り

地球温暖化の防止に向けて、温室効果ガスの排出を削減しようとの動きが地球規模で始まりつつある。このような協調行動の試みは未だかつてなかったことであり、京都メカニズムは、その歴史的な共同作業のために考案された枠組みである。

公平性、効率性、情報の透明性、そして何よりも温室効果ガス削減への実効性など、その枠組みに要求される内容の実現は容易ではない。それが試行錯誤で進められているのがCOPの会合であり、最終的にどのような結論に落ち着くのかは、非常に興味深いところである。そして、それまでに、理論的、実験的に検証できるところは、十二分に調べておく必要がある。そこに、社会・経済・システムの観点からの分析の重要性がある。

この特集号では、京都メカニズムに対して、その問題点は何か、どのような検討が進められているのかを、第一線で活躍されている研究者の方々に解説していただいた。

まず最初に、慶応大学の山口光恒氏に、京都メカニズムの内容と、その意義・問題点についてわかりやすく解説していただいた。そして、環境庁の関屋毅史氏には、国際交渉と各国の対応の最近の状況について、東京理科大学の森俊介氏には、IPCCの活動内容について、それぞれ解説していただいた。このような現在進行中の状況について執筆いただくのは大変難しいところであるが、それだけに貴重な情報を提供していただいたと感謝している。

アカデミックな接近法としては、3つの異なる観点からの分析手法について説明していただいた。

まず大阪大学の西條辰義氏には、ゲーム理論の観点からEU提案の妥当性の検討結果について、慶応大学

の早見均氏には、国際産業連関表を用いた国際技術協力評価の手法とその適用結果について、そして、東京大学の藤井康正氏には、最適化型世界モデルを用いた京都メカニズムの有効性の評価結果について、それぞれ解説していただいた。京都メカニズムという一つの問題に対して、技術評価と社会・経済の評価、国レベルの分析と複数国・世界レベルの分析など、種々の異なった視点からの検討が行われている。その難しさ、面白さの一端をお伝えできたのではないだろうか。

そして、最後に、二酸化炭素削減の切り札の一つである植林について、外国で植林活動に長年に携わっておられるブラジル永大木材の佐藤卓司氏に、その問題点と国際協力の必要性について解説いただいた。国際協力により移転された技術や設備は、最終的には、やはり現地の人により維持されるものでなければならない。そのためには、現地の状況を詳細に調べる必要がある。その貴重な事例を紹介していただいた。

以上のように、本特集号では非常に多岐にわたる観点から京都メカニズムについて解説していただいた。多様な問題があり、それに対して種々の接近法があることを感じ取っていただくことが、本特集号のねらいである。それだけに執筆者の選定については、多くの方のご助力を得た。執筆頂いた方とあわせてここで御礼申し上げたい。

目の前に解決しなければならない問題がある。そして、状況を少しでもよい方向に持っていくための方策が求められている。それに対して何ができるか、人間の叡智が問われているのである。

手塚哲央

(京都大学大学院エネルギー科学研究科助教授)